

「すべてのいのちを守るための月間」に当たって

いのちのすこやかさ

瀬本正之神父(イエズス会)に聞く

「すべてのいのちを守るための月間」(9月1日〜10月4日)に当たり、瀬本正之神父(イエズス会)に聞く2回連載の後半。瀬本神父は、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』の翻訳者の一人で、今年3月まで上智大学で環境倫理関連科目を担当していた。今回は、人間が生きる上で欠かせない「基本的な関係性(かかわり)」と、「エコロジカルな回心」について。

(下) 人間らしいいのちを生きるために

「インテグラル(総合的な)・エコロジ」は、クリスチャンだけのものではありません。『ラウダート・シ』について、わたしはかつて「環境問題への真摯な取り組みは創造主から責任を問われる信仰上の課題である」との教皇の確信は、信仰者、無信仰者を問わず、環境問題と格闘する多くの人々に歓迎されました(『聖書と典礼』2017年6月11日)と評しました。

回勅が伝える教皇の「熱い思い」、教会の「熱い望み」「熱い願い」は、損なわれる地球と疎外される貧しい人々の叫びに耳を向けさせる「聖霊のうめき」のこだま、現代の「時のしるし」に目を向けるよういざなう「聖霊の促し」への応答のように思えたのでした。

四つの基本的な関係性

前回は「生きとし生けるもののいのち

三つ目は、「誰にも代わってもらえない自分固有の生涯を生きていく」という実存的な生の現実です。成長につれて自分自身と向き合うようになり、「どのように生きていこうか」等々の自問を経て種々の選択を重ねつつ、有意義な生涯を形づくっていく歩みで、そこには基本的な「自分自身のかかわり」が息づいています。

最後に、わたしたち信仰者が、自分たちの体験を通して、その存在を知りその重要性をわきまえている基本的な「神のかかわり」を挙げなければなりません。万が一、創造主との関係が完全に失せてしまえば、わたしたち人間を含むあらゆる被造物は存在することさえできません。

何かが現に存在していると認めることは、その何かに存在を付与しているものの存在を認めることに他なりません。「存在する力を自らの内に」有さないものが現に存在しているという事実は、「存在する力を自らの内に」有する何かがそれに存在を付与していることの証左です。

これら人間存在を構成する「四つの基本的な関係性」を全てしかるべく大切に育てていかなければ、「生きとし生けるもののいのちのすこやかな営み」に支えられておりまたその支え手でもある「人間らしい生の営み」はあり得ません。

祈りや神との親しさを大事にすると言いながら、平気でモノを使い捨て無情に人を切り捨てる生き方は、基本からして「人間らしい生の営み」とは呼べず、遅かれ早かれその人の「神のかかわり」をもゆがめてしまうでしょう。

自分のことばかり気にして、他の人や自然環境にはまったく無関心といった在り方も、「いのちの営み」の特徴である「健全なバランス」を欠いていて、人間的な成長を損ない、人格を未熟さの中に閉じ込めてしまいかねません。

どの「かかわり」から入るかは人さまざまですが、四つの「かかわり」の成長・成熟はどれも「人間らしい生の営み」に不可欠であり、相まって相乗効果をもたらしつつ、その人なりのバランスあるいのちの営みを培っていくことでしょう。

エコロジカルな回心

最後に「エコロジカルな回心」について一言。それは、被造物を「搾取の対象」とするのをやめ「創造主からの聖なる贈り物」と思えるようになる内的な変化を指す言葉です。

自然の中で心を開き、空の青さや水の清さや緑の輝きを感じ入るとき、信仰者ならそれらを創造なさった神に賛美と感謝をささげたいくなるものです。そうしたことが人間として生きる上で決定的に重要なことであると感じ取れたなら、それは「エコロジカルな回心」

の始まりと言えるでしょう。

ところで、ミサの後半部(感謝の典礼)の出だしに、司式司祭は「神よ、あなたは万物の造り主、ここに供えるパン(ぶどう酒)はあなたからいただいたもの、大地の恵み、労働の実り、わたしたちのいのちの糧(救いの杯)となるものです」と唱え、会衆が「神よ、あなたは万物の造り主」と応答するところがあります。わたしたち人間存在を構成する四つの基本関係とそのシナジー(相乗作用)がとても絶妙な仕方で言い表されているように思えてなりません。

すこやかないのちをもたらす「大地の恵み」が、人間相互の健全な協力を通してもたらされる「労働の実り」として皆の手に届き、「わたしたちのいのちの糧(救いの杯)となる」ように計らってくださる「万物の造り主」である神。その方に向かって、「あなたからいただいたもの」を感謝の内に拝受し、その方のいつくしみの偉大さに打たれつつ賛美をささげることのできる神の民の一員とされた喜びの中に自分を見いだせる幸いなわたし。

そこには、自然界との、隣人との、また創造主との、そして自分自身との「和解」をことごとく人間本来の心の安らぎがあります。こうした「インテグラル(総合的・十全・全人的)な和解」への根本的な方向転換こそが「エコロジカルな回心」の真髄と言えるでしょう。